

セブンスデー・アドベンチスト教団



アドベンチスト

はらしゆく

July



## 「なくてならぬ一つのこと」

SDA教団理事長 金城 健祐

救い主イエス・キリストは、ご自分の家庭を持っておられませんでした。しかし、キリストは静かな家庭とご自分の話を喜んで聞いてくれる人たちを大事にされました。

ある日、イエスはベタニヤ村に来られ、ラザロの家でくつろがれました。姉妹のマルタとマリヤは喜んで迎え、最上のもてなしをしました。特に年上のマルタは、食事の準備で忙しくしていました。一方のマリヤは、主の足下に座って、イエスの話に聞き入っていました。業を煮やしたマルタは、イエスに対して非難めいたことを言いました。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」主はお答えになりました。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし必要なことはただ一つだけである。マリヤは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」(ルカ10:40~42)

マルタとマリヤは、双方とも主を愛していました。しかし、その手法が違っていました。マルタは最高の料理で主を接待しようとしていました。一方のマリヤは、主の足下に座ってみ言葉を傾聴することによって主をもてなしました。イエスは、両方とも快くお受けになりました。ところが、マルタがマリヤの態度を非難したとき、イエスはマルタに対してマリヤにとって、主の足下に座ることが今もっとも必要なことだ、彼女からそれを取り上げてはならない、と言われました。

私たちの生活の中で、マルタのような活動も必要です。マルタのような人がいなければ、教会はなりたっていきません。主は、マルタがいらないと言われたわけではありません。マルタがいたからおいしい食事もいただくことができ、団欒の時を持つこともできたと思います。

ここで主が指摘していることは、私たちのクリスチャン生活の中で何が優先されなければならないかということでした。主イエスは、「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」(マタイ6:33)と言われます。「マルタにとって必要な『一つのもの』は、落ち着いた、信心深い精神、未来の永遠の生命について知りたいというもっと強い熱望、霊的進歩に必要な徳であった」(『各時代の希望』中386頁)

私たちは、この世で生き、生活することを許されています。各自仕事を持っています。毎日忙しさに追われています。教会で活動もしなければなりません。どういう立場、どういう職業を持っていようと、キリスト者として大切なことは、主のみもとに「ひざまずく」ことではないでしょうか。主から「いのち」を受け、そして出て行くのです。イエスは、よく祈られました。私たちも祈る必要があります。毎日10分でも15分でもみ言葉を学び、祈って、主と交わる必要があります。これが「なくてならぬ一つのこと」です。

# 「気温50度の中で」

渡辺 日出夫

Adventist Development  
and Relief Agency

インド西部地震  
救援プロジェクト・レポート

## ラパールへ

私は2月から3月末まで、教団青年部プロジェクトで、マレーシアに行っていました。帰国してすぐに、ADRAから「インドに行つて欲しい」と言われたので快諾！そして1週間後(4月5日)に、期待より不安の多い中、インドに行きました。

場所は、インド西部グジャラート州カッチ郡ラパールという小さな町です。町といっても、砂漠の中にある本当に小さな町です。ラパールは、地震で壊滅状態となりましたが、インド政府や国際援助組織の援助の手が届いていない場所でした。今回ADRAは、日本医療救援機構(MeRU)という日本の医療援助専門のNGOと協力をして、「野外病院」(大きなテント病院)を設置し、緊急医療救援プロジェクトを3か月間行いました。野外病院は2月から運営していたので、私は、プロジェクトの後半を受け持つ形で派遣されました。また、私と同じ時期に、MeRUから保健婦が1名派遣されました。

## 毎日毎日、鉄板の上で

まず、現地について驚いたのは。「あ、あつうい」でした。直前まで赤道直下のマレーシアにいた私でさえも、「熱い」と感じたのです。決して「暑い」ではなく「熱い」んです。まるで湿気のないサウナ？それとも熱い鉄板の上？という感じで、体験したことのない気温と日差しでした。

数年前、私はモンゴルで「マイナス40度」を経験していましたが、今回はインドで「プラス50度」を経験することになったのです。その差は

病院には、ラパールから900km離れているアドベンチスト病院から医師2名、看護婦3名、ヘルパー4名が派遣され、現地雇用スタッフ5名、日本人2名の計16名で運営されました。このほか、現地政府から医師と看護婦が10日間交代で数名派遣され、病院運営をしました。

## 「たったの50度だよ」

熱いプロジェクトサイトで活動を続ける私たち

には、一つの合言葉がありました。それは

“Only 50 degrees” (たったの50度だよ)

です。派遣されたインド人スタッフにとっても、未知の気温50度。水分摂取を忘れるとすぐに脱水症状に陥る過酷な状況でした。「熱い」のは十分過ぎるほど分かっていたので、私たちは未知の気温50度を「たったの50度」と思う努力をしたのです。しかし、現実はいかに

昼間のテント内でも40度を軽く超え、夜寝るときでも30度。しかし、夜の30度は、私たちにとっては「涼しい！」と感じました。夜は、私にとって最高の時間でした。高層ビルのない場所で月明かりに照らされて。改めて月が明るいことを認識しました。新月のとき、夜空は星だらけ！神様が備えて下さった自然に感謝しました。

食事は、日本人が愛する「インドカレー」を毎日3食も頂きました。日本から即席みそ汁やふりかけを持参しましたが、滞在していた40日間、一度も日本食にお世話になることなく「毎食カレー」を堪能させて頂きました。

## サイクロン来襲！

現地入りして数日後のことでした。午後から強風に見舞われていたのですが、夕方5時過ぎ、突然のサイクロンです。一時待機をしましたが、ふと気がつくと、重さ数百キロの我々のテントが、まるで綿のように、ふわっと持ち上がりました。とっさにテントに飛びつきましたが、自然の力には勝てず、そのままテントは反転してしまいました。テント復旧までに4時間を要しましたが、幸いなことに人的被害もなく、みな無事でした。これも皆様のお祈りと神様のお守りのお陰だと感謝しております。

## “JAPAN HOSPITAL”

MeRU/ADRA病院は、現地で「ジャパン・ホスピタル」と呼ばれて親しまれ、毎日100名を超える患者が診察に訪れました。休診日でも、何名も患者が訪れてきました。



ラバール町



野外病院

病院は、小手術や入院のための設備を兼ね備えており、地域においても、設備が整っている病院として高く評価されていました。患者は、整形外科と小児科に来る人が多く、毎日骨折の患者が絶えませんでした。また、あるとき、感電をした人が急患として運ばれてきましたが、残念ながら、治療が間に合いませんでした。そんなケースが何件ありました。

また、治療がよいという噂を聞いて、数十キロも離れたところから数時間かけて来院する患者もいました。

### 移動診療で1,100名を診る

通常の診察以外にも、週3回、病院から約80km離れた地域で、移動診療（モバイルクリニック）を行いました。移動診療を行った地域は、数十キロにもわたる「塩の湖」に囲まれている「カディール島」という場所でした。周囲は、見渡す限り「塩」ばかり。その中に水たまりのようなところがあるにはあるのですが、その水はまるで「死海」です。水に浮かんで新聞も読めるほどの塩分だそうです。約3か月間に移動診療で診察した患者数は約1,100名。まだまだ需要のある移動診療は、現在は現地政府によって引き続き行われています。

### 3か月間の患者総数7,700名余

移動診療を含め、診察の実施には、多くの住民の協力を得ました。ジャパン・ホスピタルで

は、3か月で6,600名を超える患者を診察しました。移動診療を合わせると、7,700名を超えます。また、11名の新しい命が我が病院で誕生しました。最初に産まれた男の子には「アドラベン」というADRAの名前が、女の子は「メルバ」というMeRUの名前がつけられたそうです。（現地語で「ベン」は男、「バ」は女を意味します）

このように、本当に現地の人に愛されていた病院は、5月9日をもって現地政府に引き渡しが行われました。病院は、政府診療所内に移動しましたが、現地政府によって「ジャパン・ホスピタル」として、今も多くの住民に愛されて、日々診療を行っています。

今回のインド・ミッションでは、今までにない経験ができました。サイクロン被害、毎食カレー、摂氏50度など、日本では味わえない経験でした。そんな中でも、日々神様の御言葉やお祈りを通して、勇気と元気が与えられました。

このミッションを最後に、しばらくADRAと日本を離れることを決意しましたが、今度皆様にお会いするときには、更に大きくなってお会いしたいと思っております。どうぞ、これからもADRAの活動を覚え、お支え下さい。

神様に感謝しつつ。

（渡辺さんは、2・3月マレーシア、4・5月インド、そして今度はカナダ・トロントへ！ 英語の勉強を主な目的として、6月26日、またもや離日されました。編集部）

## 日野瑞代さんを悼む

熊谷 幸子

深緑に映える光の眩しい日曜の午後、瑞代さんは、愛するご家族に見守られて眠りにつかれた。その僅か二日前、武井先生と枕辺で祈り、握らせていただいた手の、柔らかく暖かな感触が、今も尚私の掌と悲しみの中にある。自分よりお若い方をお送りするのは本当に辛い。ましてや同じ右の腎臓癌を患い、お互い励まし合ってきた姉妹である。瑞代さんご自身もどれほど無念であったことが。

癌は際立った体験である。底なしの穴の淵に立たされているような恐怖と孤独に絶えずおそわれる。けれど瑞代さんは、癌と死を受容されていた。その上で叶う限りの医療の最先端の技術を受けられた。九段病院に見舞ってお話を伺うたび、過酷な苦しみに耐え抜かれる前向きの強い精神力と信仰の力に、ただ圧倒されるばかりであった。

そんな病床にあっても、ご家族や見舞客をふと笑わせたり、逆に励ましたりすることを彼女は忘れなかった。それは、残る人たちを立ち上らせ、前に進ませるための、母として妻として、また一人の人間としての大きな愛であったと思う。深沢のお宅で感嘆した、瑞代さんの傑作シャドウボックスの数々は、死の一週間前ホスピスに運ばれ、多くの患者さんを和ませ、慰めたときく。

いつか誰もが迎えるはずの死、その死の真の理解が、向き合い、聴き合い、触れ合うという直接性にあることを、改めて教えていただいた。それはとりも直さず、今をどう生きればよいかを示してくださったことに他ならない。

告別式の甲辞の最後を、私はこう申し上げて結んだ。

「あなたのすばらしいピアノの音色をお聴かせいただけなかったのは、とても残念です。でも私たちは、天国で共に音楽を楽しめる日の来ることを知っています。ですから、これから申し上げる『さようなら』は、再びお会いする日のための『さようなら』です。瑞代さん、さようなら」と。

瑞代さんの「わたし一人だけが救われるのはいや」と叫ぶように言われた、信仰と愛の意味の深さに衝かれた日のことを、私は忘れることはできないだろう。瑞代さんの生きる力を引き出し、支え励まし続けたご家族のこともいつも心に覚えて、お祈りしていきたい。

---

## 御礼

ケン、クリス、ゲアリー&ヒーザー・シンプソン

皆様、マークは5月27日、イエス・キリストにあって眠りに就きました。闘病中、絶えずお祈り下さいましたことを感謝いたします。皆様の熱心なお祈りを神様がお聞き届け下さったことを、私たちは信じています。なぜか神様は、この病の時がマークにとって最善の時であると思われたようです。それは、この病を通して、彼は霊的に素晴らしい成長をしたからです。マークの死は、もちろん、私たちにとってとても悲しいことです。しかし、私たちには復活の希望がありますし、彼は主にお目にかかる準備ができたのだと確信しています。マークは最後まで癒される希望を持ち続けていました。癌との激しい闘いの間中苦しむことのなかったことを主に感謝します。日曜日のこの日、早朝に意識が薄くなり、やがて眠ったまま平安のうちに午後1時55分、息を引き取りました。

マークは、大学ではビジネスを専攻しましたが、一生を教会と宣教の働きに捧げました。23年の生涯でした。日本では、広島と原宿の英語学校で奉仕をさせていただきました。

なお、葬儀のためにお花をという有難いお申し出につきましては、その分お志を有効に使わせていただきたく、これをもとに、テキサス州キーンにある彼の母校に学生宣教師奨学金制度（「マーク・シンプソン記念基金」Missionary Scholarship Fund at Southwestern Adventist University in Marc's Memory）を設立し、皆様のマークに対する思い出を残したいと存じます。花はやがて枯れますが、奨学金は、それを受けた学生によって、主の働きが続けられますので、敢えてこのような提案をさせていただく次第です。マークも大いに喜びとすると存じます。皆様のご理解ご協力とお祈りとご賛同に感謝いたします。

（この記念基金への送金については、7月末日まで、英語学校・府録智子さんがまとめて扱って下さっています。編集部）

「聖句と私」

坂本 和俊

「イエス様に目を向けていないことが罪である」と教えていただいても、目を向け続けられない自分の弱さに押しつぶされそうになるとき、次の聖句によって励まされる。

「あなたがたは、主にあつていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい。主は近い。何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求むるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあつて守るであろう」 (ピリピ4:4~7)

自分の罪や弱さは、聖書に親しめば親しむほどはつきりと見えてくるが、見えてくるほどにイエス様にあつてしかいただけない平安の喜びが大きくなっていくように、イエス様から目をそらさないよう祈り続けていきたい。

原宿彩彩

おめでとございます!

井上澄さんが去る6月12日、94回めの誕生日を迎えられました。そのすっきりとしたお姿が礼拝堂に現れると、周りは歓びの顔顔顔、一段と和みます。安息日には四世代同居のお宅を出て、千駄ヶ谷小前からバスでお越しです。12日には曾孫さんお二人が両隣から応援、三人でバースデーケーキのろうそくを吹き消すという、ほほえましい光景も見られたとか。簡単なお食事はご自身で作り、お召し物はデパートに出かけて買って来られるとも伺いました。素敵な井上さん、ますますお元気で!

喜びに溢れて - 青年講演会

6月16日から17日にかけて、今年も青年講演会を開催致しました。8名の青年の証を通して、若くエネルギーな信仰に胸を打たれた方も少なくなかったのではないのでしょうか。今年の青年講演会の最大の特徴はといえば、みなさんもお気づきの通り、青年会新メンバーの"大量加入傾向"でして、我が青年会も次第にその勢力を増してきております。それが顕著に表れたのは、やはり、青年コワイヤーではなかったのでしょうか。神様に賛美を捧げることの喜び、そして、遣わされてある喜びを体験することのできたひととき・瞬間であったように思います。様々なタレントに恵まれた

青年たちの中央教会での更なる活躍に、皆様どうぞ祈りと共にご期待下さい。(小野上真也)

女性!女性!女性!

6月8日~10日、第2回全日本女性の集いが琵琶湖畔で開かれました。参加者150名。右を見ても左を見ても女性!女性!「主を愛し、明るく暮らし、楽しく奉仕」というテーマでメリー・ウォン先生を講師に迎えました。日本各地から信仰の友が集められ礼拝し、新しい交わりの機会が与えられました。タレントショーでは福音漫才も披露されました。これから女性の働きが益々楽しみです。主は中央教会の女性のあなたも期待しています。(武井今日子)

手摘みとの一筆添えて新茶着く (武国)  
 いさかしまの別れや柿若葉 (〃)  
 雨上り頭を垂れし四葩かな (夏)  
 満開の菖蒲田写す人の群 (〃)  
 ビル街の谷間の枇杷の色づきぬ (米子)  
 ルノールかマネか日傘の佳人来る (保)  
 若葉みち銀輪りんりん朗ら声 (〃)  
 三句目の四葩とは紫陽花の事、  
 七変化とも言います。(茂子)

## 牧師によるバイブル豆事典

## ガリラヤ湖と死海

7月20日は「海の日」です。聖書の中心舞台となったパレスチナにはガリラヤ湖と塩の海（死海）があります。ガリラヤ湖から死海までの直線距離は105km。しかし蛇行しているため、実際には320kmに及びます。水の源はヘルモン山麓の泉。そこから流れ出るダン、バニヤス、ハスパーニの三つの支流が一つに合わさってヨルダン川をつくり、豊かな水は、フレ谷、ガリラヤ湖を通過して南下を続け、死海へ注ぎます。ガリラヤ湖は淡水湖で、いわしや淡水魚がいます。一方、死海は塩分含量が35%（紅海4%）と高く、浮き輪なしで水面に浮かんだまま本を読むことができたり、色々な養分を含んでいるのでリウマチや神経痛の治療によく効きますが、魚はいません。生物が生きることはできません。死海には、入り口があっても出口がないのです。水を受けるばかりです。その結果、水はよどみ乾燥した気候のため水分は蒸発し塩分の高い海となって、命を育むことができません。私達も、恵みを受けるばかりで分け与えることなしでは、死海状態になってしまいます。「与えるべきものを惜しんで、かえって貧しくなる者がある。物惜しめない者は富み、人を潤す者は自分も潤される」(箴言11:24~25) 私達が受けた命の水を必要としている人が大勢います。主は渴いている人の心を潤すため、私達の差し出すコップ1杯の水を用いられるのです。

(副牧師 武井今日子)

## 7月のスケジュール

- 7 / 7(土) [説]花田憲彦副牧師 音楽礼拝  
各部役員会  
長老会 15:00 ~
- / 8(日) PFC普通集会
- /14(土)[説]板東洋三郎牧師 & 子供のお話 [合同]  
バプテスマデー  
アドベンチストはらじゅく & 週報発送  
小羊クラブ
- /21(土) [説]エリセオ・アロンソ牧師(預言の声) [合同]  
賛美と証の会 13:30 ~ 15:00 集会室  
理事会 15:00 ~ 会議室
- /22(日) PFC普通集会
- /23(月) ~ 25(水) 夏期聖書学校 集会室
- /28(土)[説]塚本俊也牧師 & 子供のお話  
小羊クラブ

教会のホームページを開設しています。

SDA東京中央教会のアドレス

<http://www.sda.gr.jp>

エデン  
ED園だより

一輪挿ししか縁のなかった家に、花菖蒲が生けられている。十数年ぶりに親との同居が始まった。結婚せよとの親の願いをよそに、右に左にフラフラする私を見かね、夫婦生活の楽しさを身をもって教える覚悟であろうか。その親に私は神様の存在をと思いつつ、実生活はこの歳になってのバラサイト。寄生虫のように彼らの生活の一部に食いついている……。この度新メンバーとして加わってくださった森武靖子氏と渡部康雄長老家族のあり方を学びたいこの頃です。(雅)

発行：東京中央教会コミュニケーション部

\* 発行人：板東洋三郎

[住所] 〒150-0001 渋谷区神宮前1-11-1 03-3402-1517

\* 編集人：前中靖司

\* スタッフ：佐藤敏子・杉千幸・寺内雅子・平山茂子・森武靖子・山口保夫